慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	週刊紙Septと地下出版Courrier français du Témoignage chrétienの関係について
Sub Title	L'hebdomadaire Sept et la presse clandestine Courrier français du Témoignage chrétien
Author	松本, 鉄平(Matsumoto, Teppei)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2018
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.115, (2018. 12) ,p.73 (76)- 90 (59)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01150001-0073

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

週刊紙*Sept*と
地下出版*Courrier français du Témoignage chrétien*
の関係について

松本　鉄平

【はじめに】

第二次大戦中のフランスに*Courrier français du Témoignage chrétien*というキリスト教系の地下出版物がある。これは元々フランス敗戦後の1941年11月から出版されていた*Cahier du Témoignage chrétien*を、よりコンパクトな形式で別途発行したものである。今回この*Courrier*（以下、本論ではこちらをTCと省略）に着目したのは、簡潔さゆえに広範な読者層を有していたこと、またそうした一般の幅広い信者に向けて、限られた紙面のなかでどのような論点に比重を置いたかが絞られる――ただし終戦間近になると両者は乖離していくが――からである。筆者はすでに戦前のキリスト教勢力による*Sept*という週刊紙を取り上げている[1]。本論ではTCにおける*Sept*との共通点と相違点の抽出を試みたい。

あらかじめ両紙の概要を比較しておこう。*Sept*を運営していたのはドミニコ会であった。他方、TCはイエズス会が深く関与している。

*Sept*が発行された期間は、1934年3月から1937年8月までの約3年半。固定読者層としての契約者数は25,000人で、平均発行部数は50,000部から60,000部とされている。また、たとえば労働問題をめぐる特集号では150,000部、共産党を取り上げた号では110,000部など、特定のテーマごとに大きく部数が伸びることもあった。

これに対し、TCが発行されたのは、1943年5月から1944年8月までの1年と3か月。ドイツによる検閲のなかでの地下出版だったため、契約者数は不明である。ただし発行部数は平均して約100,000部にもなり、総計では1,235,000部という相当な数だった。TCの場合、戦時下での地下出版という体裁ゆえ記者は匿名であ

る。ただしイエズス会のP.シャイエによって発行されたものだと判明しており、その他のイエズス会聖職者（G.フェサール、H.ド・リュバックY.モンシュイユ）と、一般信者（S.フュメ、A.マンドゥーズ、R.ダルクール）が中心となっていた。

【政治的位置】

さて、具体的な共通点としてまず挙げられるのは、思想上の典拠となる人物が重なっていることである。*Sept*においても見られた傾向であるが、TCにおいてもシャルル・ペギーの名は際立っている。「正義と真実が求めるのであれば、不服従を」、あるいは「共犯者は主犯者よりも悪質だ[2]」と説くペギーの格言の引用は、占領下フランスの立場に当てはめられている。「たった一人の人間が悲惨な状態に縛りつけられたり、あるいは同じ結果になるが、そうした状況のまま放置されるだけで、市民契約は全て無に帰する[3]」。

より身近な世代としては、これもまた*Sept*と共通して、ジャック・マリタンが挙げられる。戦時中の彼は北米に亡命していた。「友人の皆さん、私はあなたがたに兄弟のような愛情と称賛を伝えることができて幸せです。私たちは絶えずあなたがたのことを考えています。あなたがたのカイエはこちらにも届いています[4]」。

もう一人、ジョルジュ・ベルナノスの名を挙げることもできるだろう。彼のほうは戦前のミュンヘン会談以降、南米ブラジルに亡命していた。ベルナノスの言葉は、より戦闘的で激越な調子を帯びている。「武装した教会、それが重要なのである！ああ！武器といっても大砲や機関銃の事を言っているのではない…。武装した教会とは、聖人たちを筆頭に立ち上がる教会である…[5]」。キリスト教的価値観を引き合いに出しながら、ベルナノスは「虚偽」を拒絶し[6]、「正義（リベラル）と秩序（保守）」の双方を求めている[7]。

こうしたTCの政治的傾向は、反ナチスであり、かつ反共産主義というものである。これも*Sept*の若き知識人たちと軌を一にするものであった。「ボルシェヴィスムは本質的に倒錯している」と言い、「ナチもまたボルシェヴィスムと同等に本質的に倒錯したものである」とも述べる彼らの立場[8]を明確に正当化するものは、1937年3月に相次いで発表された教皇自らによる2つの回勅の存在だった。時期的には*Sept*が廃刊される年にあたるものだが、そのスタンスは以前から*Sept*のあいだで継続的に共有されてきたものである。「教皇ピウス11世は、回勅*Divini Redemptoris*において無神論的共産主義を批判すると同時に、回勅*Mit*

*brennender Sorge*においてナチスの教説を批判していた。共産主義と戦うことができる唯一の力とは、国家社会主義ではなくて、キリスト教なのだ[9]」。

さらに、戦時下における地下出版という状況にもかかわらず、目の前にある脅威としての戦争だけでなく、戦前の社会体制、すなわち資本主義そのものに対する批判も垣間見える点でも、*Sept*と共通する長期的な問題意識があったといえよう。「すべての人間の母であり、あらゆる政治－経済体制を超えたところにある教会は、自らの使命を果たしていない一部のブルジョワ階級と同盟を結ぶことはない。また、社会問題に取り組むカトリックの重要な聖職者たちがその非人間的形態を何度となく批判しているところの資本主義に対しても同じである[10]」。

そしてこのような資本主義による社会の悲惨に対して改善に取り組もうとする点では、共産主義とも協力する余地はある、という立場も*Sept*と重なるものである。モンシュイユ[11]は、たしかに「キリスト教徒が共産主義の教説を受け入れるのは不可能だということは明白である。（…）キリスト教徒は共産主義の無神論を受け入れることはできない」と語る。また「人類の改良は、経済状況の改良に依存しているという共産主義の確信」や、「目的を達成するためにあらゆる手段を正当化する発想」に対しても、根強い反発があったのは事実だ。ただし具体的な社会問題においては、協力の可能性を残していた。「すべてに反対するというわけではない。不当な貧困から労働階級を救出し、正当化しえない一部の特権を消滅させるという共産主義の意図に対しては、私たちは反対しない」。

【共有された思想】

次に、思想的にも連続した部分を指摘することができる。まずは、TCが「宗教的次元と世俗社会の区別」を唱えているところである。これは*Sept*でかなり掘り下げられた「アクション・カトリック」という議論、すなわちキリスト教徒の社会参加のあり方を踏襲するものである。「キリストが、人間たちの組織においてトップに立つ特定の者と同じ次元に置かれるなどというのは耐えられないだろう」、言い換えれば「キリストは一時的な党派や政策を超越している。キリストの王国はこの世に属すものではない」と述べているように[12]、キリスト教を「政治的」（モーラス主義的）次元から切り離す発想のことである。なぜなら「教会の力とは、教会自らが発する言葉のなかにあるのであって、政治的な権力のなかにあるのではない[13]」からだ。

こうした政治闘争からの離脱は、彼らにとって、極めてキリスト教的な「普遍性」というテーマと結びついている。これも我々が*Sept*で注目した主題であった。TCでも、「我々のキリスト教的使命は、普遍的なコミュニオンに関わっている」と述べ、「慈愛の普遍主義」（l'universalisme de sa charité）を明確に重視していることを見逃してはならない[14]。また、*Christian News Letter* 181号から、カトリックの原義を踏まえた「普遍的な教会[15]」（L'Église universelle）という言葉も引用している。

この「普遍性」への志向は、ナチス的な「人種主義」との対比で考えられている点も同様である。たとえば「ユダヤ人も、ギリシャ人もない。主人も、奴隷もない」というパウロの言葉を持ち出しつつ、「すべての人間は、神において万人の兄弟である[16]」と語っている。また実際の聖職者による「キリストの証言者たる貴方たちは、誰に対しても善良に、親切に、心を尽くし、慈愛を持ちなさい。その人がどんな人種であっても、どのような職業に就いていたとしても」という表現や、1902年のシャルル・ド・フーコーを引きながら、「私はすべての住民のあいだで暮らしたいのです。キリスト教徒であれ、イスラム教徒であれ、ユダヤ教徒であれ、偶像崇拝者であれ、彼らの兄弟として、普遍的な兄弟として」といった言葉も見られるのである[17]。

彼らの考える「普遍性」が、そのまますぐに個々人の多様性を吸収し、飲み込んでしまうようなものとしては考えられていない、という点も重要である。これも*Sept*のアクション・カトリックをめぐる議論でもみられることで、宗教的なつながりと、世俗社会における集団や団体では次元が異なるためだ。したがって彼らの議論では「普遍性」が強く自覚されつつも、「個人」（ペルソナ）がそこに吸収・消失されるようなあり方は望まれていない。むしろ「人間」の自律した領域が重視されており、その「権利」や「自由」などは確保されるべきという立場となる。「人間の権利が不可侵なのは、もっぱら人間が神の権利の不可侵の正義に根ざしているからである[18]」。つまり、「自由、より正確に言えば、個人（ペルソナ）の尊厳に対する擁護や開花を妨げるような物質的あるいは人間的な隷従からの解放[19]」こそを求めているのである。

この結果、彼らの議論する「普遍性」は、国家や人種、あるいは階級を飛び越えて「個人」へと向かう。その普遍性とは、「個人に呼びかける慈悲深き愛[20]」なのである。こうした「隣人愛とは、個人（ペルソナ）の態度」であり、「イエ

ス・キリストが各被造物のみじめさに与えようとした尊厳と名誉」を認めることだとされる。そこから、被造物としての「平等」の議論にもつながっていく。「一部の人間や民族が富を得て支配する権利を持ち、その他は悲しんだり苦しんだりする権利しか持たないというような状況に、神の教会がどうして同意できようか」。そしてこれもまた*Sept*において見られた議論であった[21]。

そのほか、エキュメニスムという重要なテーマが*Sept*と連続している点も看過できない。エキュメニスムへの志向がカトリック内で正式に認められるのは1960年代のことであり、そうした先駆的な議論が、戦時下の地下出版のなかでも（あるいは危機的状況ゆえに）意識されていたという点は注目に値するだろう。実際、フランス国内において改革派教会の牧師たちが逮捕されたという情報が伝えられているが（マルセイユ、リヨン、サン＝ディエ、モー、モントルイユ）、ここにカトリック教会の神父たちの名前も併記される[22]（リヨン、トゥールーズ、パリ）といったことが自然に起こり、また「カトリック教会と、プロテスタントの諸教会は、決定的な瞬間に出会った。両者はともに抗議を打ち立て、お互いに協議を行った末に、国家当局に対して、メッセージを表明したのだった。ここには、未来へ向けた重要な兆候があった[23]」という文章も確認できるのである。

【国際性とプロテスタントとの関係】

つづいて相違点を見ていこう。参照項となる人物の重複はすでに確認したが、そのほかTCで引用される雑誌および人物には異なった傾向が見られる。たとえば、TCには*Sept*でも重要だったリール大司教リエナールや、ボルドー大司教フェルタンも登場するが、またトゥールーズ大司教サリエージュ、リヨン大司教ジェルリエ、マルセイユ司教ドゥレーなども見られる。なかでも目立つのはトゥールーズ大司教のジュール・サリエージュの記事である[24]。サリエージュは元々アクション・カトリックの熱心な活動家で、かなり早い段階でナチスについて批判的だった。人間的個人の尊重ゆえ、反ユダヤ的政策への反対を公言していた数少ない大司教の一人である。あるいはイエズス会のなかで社会運動に取り組む一派が創刊した*Cité nouvelle*（のちレジスタンス）との連携として、ディヤール（Victor Dillard）神父の発言への言及がある[25]。またレジスタンス系の地下出版*Défense de France*とのつながりもある[26]。加えて、枢機卿会議とフランスの大司教たちによ

る、英国に対する空爆への抗議文書など、広範な聖職者ネットワークも窺える[27]。

さらに国外との連携は、いっそう注目すべきである。まずはフランスのカトリックとの連携が元々深かったベルギーである。TCでも言及されるデジレ＝ジョゼフ・メルシエ枢機卿[28]は、二重の意味でベルギーとTCとのつながりを表している。

まずメルシエは元メヘレン大司教であった。この関連で、同じくTCに登場する後任のメヘレン大司教だったファン・ローイ（Joseph-Ernest Van Roey）にも注目することができよう[29]。彼は1920年代から40年間近くメヘレン大司教を務め、ベルギー王族の結婚式も担っていた重要人物である。教育者でもあり、ナチスに抵抗し、とくに若者のドイツへの強制労働を激しく批判した。

もう一つは、メルシエがルーヴァン・カトリック大学で哲学を教えていたことである。1943年、同大学の学生が集団でナチスに抵抗し、ファン・ワイエンベルク（Honoré Van Wayenberg）校長がゲシュタポに逮捕された事件が取り上げられている[30]。彼は、メヘレン神学校でメルシエ枢機卿に学んだ人物である。ドイツによる1940年のベルギー侵攻では、ルーヴァン付近で起こった5月の戦闘のなか、自ら救助活動にも加わった。早くも7月には大学を再開したうえ、大規模徴用に反対し、ナチス当局への大学登録者名簿の提出を拒否して逮捕されている。

そのほかカトリック国としては、たとえばポーランドから、ブレスラウ(現ヴロツワフ)大司教のベルトラム枢機卿（Adolf Betram）を取り上げている[31]。彼は、現在のポーランド南西部にあったブレスラウの大司教である。当時はドイツ領であったが、彼は全国の司教が総結集するドイツ最大のカトリック会合「フルダ司教会議」の議長を終生続けた、ドイツ・カトリック界の大物である。1930年代からナチスとは軋轢があり、ポーランド人の処遇や「レーベンスボルン（アーリア人増殖計画）」などに反対していた。

東（南）欧についても確認できる[32]。クロアチアから、ザグレブ大司教によるユダヤ、セルビア人、正教徒、ジプシー、カトリックなどの被迫害者への擁護が伝えられている。これはおそらくステピナツ（Alojzije Stepinac）のことであろう。ウスタシャが支配するクロアチア国内の民族弾圧政策への抗議文である。またスロバキアからも「7人の司祭」によるヨゼフ・ティソ政権下での反ユダヤ政策に対する告発が挙げられている。

次にオランダのキリスト教勢力とのつながりを見てみよう。ユトレヒト大司教

――おそらくデ・ヨング（Johannes de Jong）のことで、反ナチスのオランダ・レジスタンスの重要人物――や、ブレダ、ルールモント、ハールレム、スヘルトーヘンボスなどにおける司祭らの声を伝える記事では、「当初、オランダには仕事もパンもないからオランダ人は外国へ労働をしに行かねばならないのだ、と言われていました。しかし現在でははっきりと明言されているのですが、ドイツの勝利を確かなものにするために労働をしに行かなければならないのです[33]」と語られている。またオランダ関連の記事では、カトリックとプロテスタント双方の併記が見られる点も特徴的である[34]。

こうしたオランダのプロテスタントとのつながりはTCのなかでも極めて重要である。オランダのプロテスタント系レジスタンス地下出版*Vrij Nederland*についての言及[35]のほか、とりわけオランダ牧師フィセルトホフト（Willem Visser't Hooft）には注目すべきである。「絶対的なニヒリスムを前にして、神は存在するという言明、神は弱者を守るという言明だけが影響力を有している。（…）したがってこうして戦う教会のレジスタンスは、武力によるレジスタンス以上に重要なのである[36]」。フィセルトフトは、占領下フランスにおける最初期のキリスト教レジスタンスの表明文書として有名な「ポメロル綱領」（1941年9月）を実質的に主導した人物である。オランダ牧師の彼は、もともと欧州プロテスタント学生団体で頭角を現し、1938年に若くして「世界教会協議会（COE）」の総書記となった。その名のとおり、この協議会は戦後エキュメニスムに関与していく。

フィセルトフトはフランス人ではないため、「ポメロル綱領」の起草を実現・署名したのは、仏プロテスタント「フランス改革派教会（ERF）」――有名なマルク・ブグネール（Marc Boegner）が初代の代表――だった。この綱領は、カール・バルトが1934年に起草したドイツ西部での「バルメン宣言」（およびボンヘッファーやニーメラーらを中心に結成された1933年「告白教会」）の影響を強く受けており、反ナチス・反ユダヤ人迫害を表明し、1942年から全仏に配布されたのだった。

次いでスイスであるが、この「ポメロル綱領」に署名した人物で、TCにおいても際立っているのは、本論でも何度か登場するド・ピュリィ（Roland de Pury）である。彼は、仏語圏スイスのプロテスタント牧師で、敗戦直後からナチスとヴィシー政府の批判をしており、人権派としてユダヤ人保護とスイス脱出に関わった。また、スイスにおける仏語新聞との連携もみられる。チューリヒ発行の*Neue*

*Zürcher Nachrichten*がアルザス・ロレーヌからの声を伝えた記事は、スイス北西部ジュラ州のポラントリュイ市で発刊されていた*Le Pays*という仏語日刊紙を経由して、TCに載っている[37]。さらに、レジスタンスをキリスト教的な行動と結びつける*La Gazette de Lauzanne* (1943年12月29日)の記事も転載されている[38]。これはスイス西部のヴォー州ローザンヌ市で発行されたリベラル系の仏語日刊紙である。

デンマークについては非常にプロテスタントの強い国であり、カトリック教区はただ一つしか存在しない。それでも同地のコペンハーゲン司教フグルサング＝ダムゴール（著名なブルンナー派神学者で、反ユダヤ政策に反発）、およびハル・コック（北欧民主主義の重要な思想家）や、カイ・ムンク（ルター派敬虔主義の牧師でもある劇作家、レジスタンスで殺害）への弾圧を伝えている[39]。彼らは、教会とノルウェー国家の対立に抗議していたのだった。

そのほか北アフリカ方面では、フランス詩人マックス＝ポル・フーシェがアルジェで創刊した有名なレジスタンス雑誌*Fontaine*（1942年12月）からの引用もあり、自由への希求を記した記事が大きく掲載されている[40]。

【戦時下の事件をめぐって】

さて、内容面での新しい主題は、STO（当時はService obligatoire du travail）への批判である。これは労働力不足に陥ったナチス・ドイツが主導した、他国からの「強制労働」（とりわけ若者）の徴用政策である。TCは「1943年11月にグルノーブルでゲシュタポが400人以上の若者をSTOへ強制移送した事件」や、「同年クレルモン・フェランに移転していたストラスブール大学で、大学生・教員・聖職者が全員逮捕された事件」といった、個々の事例についても報道している[41]。後者はおそらく大規模な「1943年11月25日の一斉検挙事件」として有名なものであろう。

これらに対し、TCは明確に反対を唱えた。「一人のキリスト教徒が率直な判断力をもつだけで、STOには反対を唱えるしかないということに気づく[42]」。なぜなら、「労働者や若者を強制移送することは法的権利に反しており、それに従う義務は一つもない[43]」からだ。そしてTCは具体的な行動の指針を示している。まずは「ドイツへと出発することを拒否しよう。（…）もしも不当な強制移送を免れることができないのであれば、強制というかたちでのみ出発することにしよ

う」というものである。また「対独協力を拒否する者に対しては、強制移送の回避や、彼らの作る抵抗組織の支援をしよう」。そして「フランスへの忠誠という困難な道を選んだ人たちの家族に対しては、精神的・物質的な援助を行おう」という内容だった[44]。

さらに、ユダヤ人迫害問題の悪化も挙げられる。STOと同様に切迫した状況、たとえば有名な「ヴィルールバンヌ一斉検挙事件」である。これは1943年3月にゲシュタポがヴィルールバンヌ市で深夜に150人以上を拘束し強制移送した出来事で、4月にコンピエーニュのFront-stalag 122を出て、「一部はオーストリアへ送られたようだ。オーストリアでは他の自由な労働者との接触が一切ない特殊な状況下で働かされているという[45]」。実際には400人で、約半分がドランシーとピティヴィエ、残り半分がコンピエーニュ経由でオーストリアのマウトハウゼン強制収容所へ送られたのだった。

そして、*Sept*には見られない問題であり、かつスタンスも大きく異なるのは、終戦を前にしたドイツ軍による戦争犯罪あるいは民間人虐殺事件についての報告と、これに対峙するフランスの「マキ」（対独レジスタンス組織）についての記事である。

ドイツ側の敗戦が見え始めた大戦末期には、民間人に紛れたレジスタンス組織への過度な警戒心や憎悪がドイツ軍のうちに生まれており、これがフランスの農村で無差別の虐殺事件を生んだ。このうち規模の大きなものをTCはかなり早い段階で報道している。

まずは1944年4月1日のこと、リール近郊のアスク村で武装SSが住民を虐殺した事件である[46]。ナチスの軍隊を乗せた鉄道が22時45分ごろに何らかの理由で脱線したことを発端として、23時ごろから武装SSによる報復が始まり、駅員3人を筆頭に、住民60人が駅前で、26人が自宅や路上で殺害されていったという経緯が、簡潔ながら具体的に報道されている。さらに後の記事では、村の聖職者も銃殺されたこと、彼らが瀕死の村民たちに「罪の赦し」を与えようとした様子、血の海のなか2人の身体は銃弾で穴だらけになったうえ、祭式用の杖で殴られた跡のある頭蓋骨は陥没していたことなども描いている。深夜のあいだに大半の虐殺が行われたのち、翌朝から午後まで兵士たちが村のカフェなどを使用していた。そして2か月半後、アスクの鉄道員6人が脱線テロ犯として死刑になったことに触れたうえで、「アスク村にはヒトラーの秩序が君臨している！」と皮肉を込め

て批判している[47]。

さらに1944年6月10日、リモージュ近郊のオラドゥール＝シュル＝グラーヌ村にて、武装SSによって行われた虐殺事件も大きく取り上げられている[48]。当日13時30分に複数台のトラックが同村に入ってきたところから始まり、村役場を通じて全住民が集められ、まず男から近隣の納屋に押し込まれ銃撃されたこと、次いで女と子供は教会に閉じ込められたうえで、教会や納屋を含む村全体に火を放ち、ほとんどが皆殺しになったさまを描写する。TCは犠牲者の数を「700人ほど」とほぼ正確に把握している。フランス当局が現地入りを許されたのは3日後のことで、リモージュ知事やリモージュ司教（ルイ・ラストゥイユ）が抗議を表明したこと、約1週間後に司教が葬儀を行ったことも伝えている。また同名のオラドゥール村（オラドゥール＝シュル＝ヴェール）と混同した誤報を整理している点でも正確である。

ほかにも、SSが仏カーンの刑務所に侵入して250人を殺した事件も取り上げており、ゲシュタポに支配されている他の刑務所（ヴィール、レンヌ、ルマン）について、警鐘を鳴らしている[49]。

こうした状況下において、TCは直接的な武力行使を支持するようになる。これは、森林や山岳地帯に潜伏してゲリラ戦を試みたレジスタンス組織を総称する「マキ」を扱った記事から知ることができるだろう。

そこでは「直接行動」という言葉が出てくる記事がある。まず上述の「普遍性」というキリスト教的テーマをレジスタンスと結びつけながら（「どのような立場であれ、我々は人間の自由を守りたい」「我々の義務とは、その出自がどのようなものであれ、我が兄弟とともに明日のフランスに『奉仕』し準備することである」）、そのための手段については、一歩踏み込んだメッセージ性の強い言葉が登場するのである。「兄弟よ、私は諸君に向けてこの手紙を『フランスのどこか』から送っている。（…）仕事や家族を犠牲にしてでも、直接行動を企てる義務が、諸君にはあるのではないか？[50]」。

また、自分たち（マキ）は何に抵抗しているのか、という定義については、「ナチスのイデオロギー」「ヴィシーのイデオロギー」「ドイツ経済」（おそらくSTOへの抵抗）に加え、「無気力な傍観主義」を挙げている[51]。ここには、抵抗といっても行動を伴わねばならないという呼びかけが暗に含まれているといえよう。

この「直接行動」は、単なる政治活動などではない。「マキ」の行動には「テロリスム」との危うい近似性があると自覚している記事もあるからだ[52]。彼らは、「あらゆるアナーキーは危険なものであり、マキもまた一つの危険な存在であることは分かっている」という。しかしその点、「マキは自らの危険性について自覚している」し、「マキは単なるアウトローではなく、自らの法を持っている」。よって「我々はテロリスムを正当化しているのではなく、マキを正当化している」のであって、「我々はテロリスムについては糾弾する」と述べている。この論拠の正否はさておき、戦前の*Sept*よりも明らかに一歩踏み込んでいるのは確かである。実際、この傾向を別の記事では端的に言い表している。「レジスタンスとは、昨日なら態度のことだった。今日なら武力のことである」と[53]。

【対ナチスの優先】

かくしてナチスに対するTCの態度は、*Sept*の立場とは異なるものとなる。それは、反ナチス・反ヒトラー主義をより喫緊の課題としたことである。戦前の*Sept*においては、基本的に「反ナチスかつ反共産主義」で双方を等しく批判していたが、ここに優先順位を設けたことになる[54]。実際、「まずは、より目の前にある、より切迫した、より近い危険に対して立ち向かわねばならない。そしてそれは私たちに降りかかり、私たちのあいだに侵入し、私たちを操るナチスの支配のことなのである[55]」。彼らにとってナチスとは「最も差し迫っており、最も切実かつ最も直接的な倒錯[56]」であった。

彼らの告発するヒトラー主義には次のような要素が見られる。一つは「虚偽」という性質である。「良心を歪める虚偽の王国[57]」によって、フランスに課された「3年にわたる長き検閲と虚偽の年月[58]」に抗し、「フランスの教会は、普遍的な教会と一体のものであり、全ての魂からヒトラー主義、およびその残酷さ、圧政、虚偽を追い出す[59]」必要を述べている。この「虚偽」とは、カトリックを含む西洋文明の伝統への回帰を、ナチスが代表し主導すると騙っていたためであろう。というのも「フルダの司祭たちの手紙」では「まだ『ナチスとは西洋文明の守護者である』といったことを信じるお人好しがフランスにいるのだろうか？[60]」という憤慨を取り上げているからである。

さらに、「あらゆる権利の源泉であり（全体主義）、人間的なペルソナを無力化してしまう、国家の絶対的で無制限な権力[61]」という「全体主義」への強い懸念

もあった。「神がいかなる地位も占めず、もっぱら総統の宗教だけが認められるような、全体主義的な国を作ろうとしている[62]」ナチス、その「全体主義的国家の無制限で絶対的な要求に反対する[63]」といった主張が見られる。

さて、反ナチスの姿勢を優先すると、必然的に避けられなくなるのは、そのナチスに協力している自国フランス側「ヴィシー政府」との向き合い方という問題であった。そしてこれは、*Sept*における「権威」や「服従」についての議論とも衝突しかねないものだった。*Sept*では、軍事的・政治的な「権力」とは異なる形での宗教的・精神的「権威」を重視し、それに「服従」することの価値や意義を再評価する議論があった。ところがドイツの占領下にあって、フランスでは伝統回帰を自称するヴィシー政府の「権威への服従」について、改めて問い直さねばならなくなったのである。ヴィシー側の「一部の者は、正当な権威に服従する義務や、国家の主権についての不可侵の尊重というものを単純に引き合いに出す」。しかし、「彼らの発想は、権威についてのキリスト教的な考えよりも、モーラス主義の考えのほうに似ている」のではないだろうか、と。

そこでTCでは次のような主張がみられる[64]。すなわち、キリスト教を騙る「ペタン元帥による既成権力への服従」をめぐって、「政府の権威への義務は、国家や郷土や魂への義務には勝らない」という考え方である。なぜならそのヴィシー政府の背後にあるのはナチスの方針だからだ。「フランスにおけるドイツ帝国の政府が、ドイツ帝国の利害、その戦争や支配にあたっての利害によって導かれていることは否定できない。彼らの政府は、我が国の軍艦や部隊を破壊したのち、我が国の産業を解体し、ドイツに奉仕させ、日々の徴発と賠償金によってフランスを餓死させ、フランスの若者を強制移送し、我々の精神を分裂させようとしている」。

だとすれば、「権力を承認することと、その権力によって発布された方策に全て服従することとは、別の問題である。言い換えれば、体制と、その立法を混同してはならないということだ」といえる。事実、「フランスの教会は、第三共和政そのものには反逆を起こさなかったが、第三共和政の多くの法律には反対を表明してきた[65]」のであった。

したがって「トップを信頼する義務というものは、状況に応じて大いに変化するものだと結論づけよう」。そして「服従の義務は、より上位の義務の前では停止する」、「我々のパトリオティスムは、レジスタンスなしには認められない」と

公言するのである。

ここからTCが提案するレジスタンスのあり方は次のようなものだった。「一定の秩序を維持し、アナーキーと報復の応酬を回避するような、正当な法には服従すること」。しかし「不当な決定に対しては無気力で応じること」。また、「効果的で、よりひどい災厄をもたらさない可能性がある場合には対独協力へのレジスタンス」を行うこと。そして「精神においては判断の自由、あらゆる虚偽との戦い、寛大さの意志」を保持すること、である[66]。

【戦後処理の問題】

最後に、これもTC特有のテーマとして、戦後処理の問題がある。TCは、途中から終戦が近いことを意識しており、「不正は、常にもっぱら枢軸国の側にだけあるわけではない。したがって我々は一方通行ではいられない。（…）2つの敵同士を背中合わせにして対立させることが重要なのでは全くない」、あるいは「キリスト教徒は、検閲者や批判者のようなネガティブな役割で終わることはできない。（…）現実的にみてヒトラー主義の脅威が遠ざかった今、それを告発するだけで満足することはもはやできないのである」など、建設的な議論の必要性を早い時点で述べている[67]。

そうした戦後処理の段階においては、新しいフランスを建設せねばならないと同時に、その過程で自分たちが拒んだはずの「全体主義」が回帰することも避けなくてはならないと考えていた。「国家というものを実現しなければならない。（…）それは人間のあらゆる欲求に応えてみせようとして人間を完全に隷属させるような宗教の真似事を望みはしない。それはあらゆる形態の全体主義に特有な偶像崇拝を要求したりはしないのである[68]」。

そして「自らで復讐をする権利は誰も持っていない」ことを指摘したうえで、「市民のいかなるグループも、（…）どの色のシャツを着た機動隊も、大臣や市長や総督や知事といったいかなる行政官も、被告が自分の主張を述べ、自らを弁護することができるという憲法上の裁判における法的権力に対し、その代わりとなる権利は有していない」と釘を刺している。

ここでは、戦後のフランスで実際に起こってしまうエピュラシオンの問題が先取りされていたといえよう。「委任されていない人間が裁判を行うという事態は恐ろしいことであるが、司法上の喜劇、すなわち裏取引に応じたり、感情のまま

に引きずられるような裁判官というのは、もっと最悪の事態である」と語る[69]。そして復讐感情を、キリスト教的な文脈で乗り越えるという論法が見られるようになるのである。「TCが攻撃し、打倒しようとしているものは、国民のレジスタンスが『ボッシュ（ドイツ野郎）』と呼んでいる人々のことではない。そうではなく、ナチ党員、もっといえばナチス化した個人であり、ナチス主義なのである[70]」と述べ、「悪と不正義に対してノンを言うこと、秩序が犯されることを全く認めないこと、これは敵を憎むということを少しも意味しない」としている。「したがって、全ての人たち、とりわけ多くの被害者たちには、いち早く慈愛というキリスト教的な法を思い起こしてもらう必要があるのだ[71]」。それはすなわち「守るべき大義についての確固たる判断。戦いのなかでの決意と粘り強さ。と同時に、あらゆる憎悪の拒絶と、すでにして正義のもとでの和解を配慮すること」の両方を保つ姿勢であろう。かくしてTCは語っている。「しかし再生の時、そして償いの時もまた近づいている[72]」と。ド・ピュリィによる「イスラエルの神の名の下でしか、赦しもありえなければ、正義もありえない[73]」という言葉からは、この和解のうちに戦後のエキュメニスムが予見されるのである。

【おわりに】

このように修道会や寄稿者などの相違にもかかわらず、両者には共通の論点が多くあった。このことから、時代・媒体・論者に依存しない「フランスのカトリック左派勢力の思潮」が持続的に存在していたことが分かる。戦況の変化に伴う新しい主題も、*Sept*における戦前の議論との連続性のなかで思考されていたといえよう。また国際性やプロテスタントとの関係では大きな進展も見られる。だが一方で、レジスタンスにおいて具体的な「直接行動」への接近も見せるのだった。これらは共に、*Sept*でも取り上げた「普遍性」という問題の可能性と困難さにも関わっており、今後もさらに考察していく必要があるだろう。

註

1 以下、*Sept*との異同については、次の研究を比較の前提としている：松本鉄平「週刊紙*Sept*とキリスト教聖職者たち」『藝文研究』第112号、2017年、pp. 163-176、および松本鉄平「週刊紙*Sept*と若きカトリック知識人たち」『慶應義塾大学フランス文学研究室紀要』第22号、2017年、pp.1-16.

2 « Le scandale de la vérité », *Courrier du Témoignage chrétien*, n° 3, septembre 1943.

3 « La Révolution nécessaire », *Courrier du Témoignage chrétien*, n° 11, juillet 1944.

4 « Message de Jacques Maritain », *Courrier du Témoignage chrétien*, n° 4, octobre 1943.

5 « Deux témoignages sur l'Église », *Courrier du Témoignage chrétien*, n° 7, décembre 1943.

6 « Le scandale de la vérité », op. cit.

7 « L'Ordre selon la Justice et la Liberté », *Courrier du Témoignage chrétien*, n° 5, novembre 1943.

8 « Collaboration », *Courrier du Témoignage chrétien*, n° 1, mai 1943.

9 « Les Chrétiens et le Front Uni de la Résistance », *Courrier du Témoignage chrétien*, n° 2, juillet 1943.

10 « L'Église et le Peuple », *Courrier du Témoignage chrétien*, n° 4, octobre 1943.

11 « Communisme », *Courrier du Témoignage chrétien*, n° 5, novembre 1943.

12 « Les Chrétiens et le Front Uni de la Résistance », op. cit.

13 « Deux témoignages sur l'Église », *Courrier du Témoignage chrétien*, n° 7, décembre 1943.

14 « Le scandale de la vérité », op. cit.

15 « Deux témoignages sur l'Église », op. cit.

16 « Les Chrétiens et le Front Uni de la Résistance », op. cit.

17 « Lettre de Mgr Saliège aux Scouts partant pour l'Allemagne », *Courrier du Témoignage chrétien*, n° 3, septembre 1943.

18 « Le Prix de la Justice », *Courrier du Témoignage chrétien*, n° 7, décembre 1943.

19 « La Révolution nécessaire », op. cit.

20 « La vocation spirituelle des nations », *Courrier du Témoignage chrétien*, n° 6, décembre 1943.

21 « Le Prix de la Justice », op. cit.

22 « Pasteurs et prêtres arrêtés », *Courrier du Témoignage chrétien*, n° 4, octobre 1943.

23 « Deux Témoignages sur l'Église », op. cit.

24 « Lettre de Mgr Saliège aux Scouts partant pour l'Allemagne », op. cit. ; « Libération Ouvrière », *Courrier du Témoignage chrétien*, n° 5, novembre 1943 ; « Mgr Saliège rappelle la voix du Pape », *Courrier du Témoignage chrétien*, n° 6, décembre 1943.

25 « Censure », *Courrier du Témoignage chrétien*, n° 2, juillet 1943.

26 « L'Église et le peuple », op. cit.

27 « Autour d'une Déclaration », *Courrier du Témoignage chrétien*, n° 9, avril 1944.

28 « Tryptique sur la fidélité », *Courrier du Témoignage chrétien*, n° 2, juillet 1943. ; « Voix d'Actualité », *Courrier du Témoignage chrétien*, n° 11, juillet 1944.

29 « Propagande nazie démasquée », *Courrier du Témoignage chrétien*, n° 8, mars 1944 ; « Tryptique sur la fidélité », op. cit.

30 « Nouvelles diverses », *Courrier du Témoignage chrétien*, n° 6, décembre 1943.

31 « Confirmation de DÉFI », *Courrier du Témoignage chrétien*, n° 2, juillet 1943.

32 « Protestations des Églises chrétiennes contre la barbarie raciste », *Courrier du Témoignage chrétien*, n° 4, octobre 1943.

33 « Déportation », *Courrier du Témoignage chrétien*, n° 2, juillet 1943.

34 « Protestations des Églises chrétiennes contre la barbarie raciste », op. cit. ; « Nouvelles diverses », op. cit.

35 « Deux témoignages sur l'Église », op. cit.

36 « Églises militantes », *Courrier du Témoignage chrétien*, n° 5, novembre 1943.

37 « Aux écoutes de l'Alsace et de la Lorraine », *Courrier du Témoignage chrétien*, n° 5, novembre 1943.

38 « Un jugement sur la Résistance », *Courrier du Témoignage chrétien*, n° 8, mars 1944.

39 « Nouvelles diverses », op. cit.

40 « Message de Liberté », *Courrier du Témoignage chrétien*, n° 3, septembre 1943.

41 « Nouvelles diverses », op. cit.

42 « Service obligatoire du travail », *Courrier du Témoignage chrétien*, n° 1, mai 1943.

43 « Encore les déportations », *Courrier du Témoignage chrétien*, n° 3, septembre 1943.

44 « Service obligatoire du travail », op. cit.

45 « Nouvelles diverses », op. cit.

46 « Toute la France doit le savoir... », *Courrier du Témoignage chrétien*, n° 9, avril 1944.

47 « Ascq », *Courrier du Témoignage chrétien*, n° 12, août 1944.

48 « Terrorisme nazi », *Courrier du Témoignage chrétien*, n° 11, juillet 1944 ; « Oradour sur Glane », *Courrier du Témoignage chrétien*, n° 12, août 1944.

49 « Caen », *Courrier du Témoignage chrétien*, n° 12, août 1944.

50 « Le Maquis à la plaine », *Courrier du Témoignage chrétien*, n° 10, juillet 1944.

51 « Conscience du Maquis », *Courrier du Témoignage chrétien*, n° 10, juillet 1944.

52 « Pour le Maquis... contre le terrorisme », *Courrier du Témoignage chrétien*, n° 10, juillet 1944.

53 « Le Devoir de résister », *Courrier du Témoignage chrétien*, n° 10, juillet 1944.

54 ただしこの反面として、ソ連側の「カティンの森」事件への態度保留がある：
« DÉFI », *Courrier du Témoignage chrétien*, n° 1, mai 1943.

55 « Collaboration », op. cit.

56 « Les Chrétiens et le Front Uni de la Résistance », op. cit.

57 « Collaboration », op. cit.

58 « Un démenti du Vatican », *Courrier du Témoignage chrétien*, n° 3, septembre 1943.

59 « Encore les déportations », op. cit.

60 « Nouvelle lettre de Fulda », *Courrier du Témoignage chrétien*, n° 7, décembre 1943.

61 « Collaboration », *Courrier du Témoignage chrétien*, n° 1, mai 1943.

62 « Un document capital », *Courrier du Témoignage chrétien*, n° 6, décembre 1943.

63 « Deux témoignages sur l'Église », *Courrier du Témoignage chrétien*, n° 7, décembre 1943.

64 « Collaboration », *Courrier du Témoignage chrétien*, n° 1, mai 1943.

65 « Encore les déportations », op. cit.

66 « Collaboration », op. cit.

67 « Lettre au comité de rédaction du T. C. », *Courrier du Témoignage chrétien*, n° 6, décembre 1943.

68 « La Révolution nécessaire », op. cit.

69 « Le Prix de la Justice », op. cit.

70 « Manifeste », *Courrier du Témoignage chrétien*, n° 8, mars 1944.

71 « Justice et Charité », *Courrier du Témoignage chrétien*, n° 12, août 1944.

72 « L'Heure des réparations et de l'expiation », *Courrier du Témoignage chrétien*, n° 12, août 1944.

73 « Le Prix de la Justice », op. cit.

参考文献

Courrier français du Témoignage chrétien, n° 1-12.

Aline Coutrot, *Un courant de la pensée catholique l'hebdomadaire Sept*, Edition du Cerf, 1961.

Renée Bédarida, *Les armes de l'esprit : Témoignage chrétien 1941-1944*, Éditions ouvrières, 1977.

Renée Bédarida, *La résistance spirituelle 1941-1944, Les cahiers clandestins du Témoignage chrétien*, textes présenté par François et Renée Bédarida, Albin Michel, 2001.

Martine Sevegrand, *Temps présent : Une aventure chrétienne, tome 1 : l'hebdomadaire 1937-1947* , Édition du Temps présent, 2006.

平野千果子「ヴィシー政権とカトリシスズム―『キリスト教徒の証言ノート』を中心に―」『寧楽史苑』第37号、1992年、pp.52-74.

松本鉄平「週刊紙*Sept*とキリスト教聖職者たち」『藝文研究』第112号、2017年、pp. 163-176.

松本鉄平「週刊紙*Sept*と若きカトリック知識人たち」『慶應義塾大学フランス文学研究室紀要』第22号、2017年、pp.1-16.